

## 徒然草

### 中央アジア中小企業開発の真のニーズとは？

阿部直美

JICA 長期専門家

(カザフスタン・中小企業振興)

アメリカの大学院でビジネスを学び、アフリカで働いてみたいという夢を漠然と持っていたのだが、修了後に赴任したのは中央アジアのキルギスだった。ケネディー大統領時代に商務省副長官を務めた Dr. Jack Behrman が創設した「Peace Corps の MBA 版」といわれ、MBA 修了生を計画経済から市場経済に移行している国に送っている「MBA Enterprise Corps」のボランティアとしてであった。2000年のことである。USAID が中央アジア 5 カ国にまたがる初めてのプロジェクト「SME Development Project」を開始するところで、そのヘッドオフィスをつな時代の中央アジアの中心都市タシケントでも、潤沢な天然資源で他の 4 カ国とは一線を画す発展を見せていたカザフスタンのアルマティでもなく、キルギスのビシュケクに置いていた。物価がアルマティより安い、タシケントよりも他の都市へのアクセスがしやすいなど様々な理由があったと思うが、当時のアカーエフ大統領により他のどの国よりも進められていた市場開放政策や地方自治制度の推進などもその一因であったと思われる。



日本人抑留者による代表的建築物  
(旧カザフ・ソビエト社会主義共和国議事堂)

ウクライナでの 3 ヶ月弱のロシア語研修を終え、プロジェクト・オフィスでの業務を開始にあたり、USAID でのブリーフィングがあった。2001年の同時多発テロのちょうど 1 年前であったが、アフガニスタンのタリバンの脅威は深刻であり、またフェルガナ地方を中心としていたウズベキスタンの「Islamic Movement of Uzbekistan (IMU)」も今よりもずっと活発に活動していた時期であった。一方で、カザフスタンのカスピ海では、シェブロンを中心としたコンソーシアムの「テンギス油田」、BP グループの

「カシャガン油田」が過去 30 年間に発見された中でも世界最大規模の油田として注目を集めていた頃であった。

USAID の若い担当者は「SME Development Project の目的はただ一つ。テロリストをカスピ海に入れないことに尽きる」と言った。そのためには、特に若い男性たちに絶望感を与えない、「Nothing to lose」の状態から脱却させなければならない、そのために雇用を増やす、

起業する機会を与えるということが重要になるのだと。プロジェクト・オフィスがアルマティやタシケントなどの大都市に加え、キルギス・オシュ、タジキスタン・ホージャンド、ウズベキスタン・フェルガナなどにも設置され、MBA ボランティアが送られたのはそのためであった。



アルマティ市内のモスクとロシア正教会

USAID の活動というのはいかようなものか、とその当時は JICA についても殆ど知らなかった自分ではあるが、とても驚きながらも納得したことを昨日のように覚えている。そして、目的がなんであれ、結果的にそこに

暮らす人たちにとってのより良い生活につながっていくのであればそれこそ「Win-Win」なのだろうと納得した。

アメリカ人と現地スタッフの同僚とビジネスコンサルティングやビジネストレーニングの業務を行っていたが、そのとき感じたことは、アメリカ人は本当に純粋に市場経済を信奉しているということであった。比較的若く、しかも MBA を終えたばかりのアメリカ人であったということもあるだろうが、「いかに儲けるか」ということを、新興宗教を説くが如く、にわか仕込みが殆どのビジネスマンたちに熱く語っていた。そんな中、地元のビジネスマンたちは、時にはこちらの指導やアドバイスに対し「アドバイスを受けてそれをもとにやってみれば、事業拡大の可能性があることは理解できた。ただ、そのためにはもっともっと働かなければならないし、もちろんある程度のリスクもある。悪いがそこまでして事業を大きくしたり、お金を稼ごうとは思わないんだ」と言って「現状維持」の道を選ぶことも決して少なくはなかった。

現状に満足し、家族とのプライベートな時間を大切にしていこう、という生き方。そこを煽って無理に大きな企業にすることはない。これこそ「Nothing to lose」とは正反対な、穏やかで人間らしい生活なのではないか。

また、SME Development Project 内でのスキームではなかったがマイクロ・クレジットも当時 USAID のグラント・プログラムなどで盛んであった。「女性のエンパワーメント」という観点からも、またデフォルトが少ないのは圧倒的に女性ということもあって、マイクロ・クレジットの多くは女性のみを対象にしていた。しかし、実際街で目にする女性たちは、華やかできれいで欧米や日本となんら変わりのない流行の服に身を包み、ネイルをほ

どこしているのも当たり前。赴任に際して、捨てても良いような洋服ばかり持ってきて、女性の仲間とともに大層後悔し、中国やインドから流れてくるアウトレットのブランドものを買いにバザールに走ったものである。伝統的なアジア的、イスラム的文化の中では女性



2017年アスタナ  
EXPO

性は多くの場合家を守る者とされているのは事実だが、ソ連時代の名残りからかばりばり働いている女性も多く、家族や親戚、またはロコミなどで雇う乳母やベビーシッターに子供をまかせ、出産後もそれまでとなんら変わりなく仕事を続ける人が多いことに驚かされた。特に女性はソ連時代からも語学や会計などを専門に学んでいた人も多く、職はそれなりにあるように見受けられたが、国営工場などで働いていた多くの男性たちは働き場所を失い、家庭での居場所と威厳を失い、ウォッカを煽り妻に暴力を振るっていたケースも少なからず見聞した。かかる状況の下、「女性のエンパワーメント」にプライオリティをつけて良いのか、真に支援を

必要としているのは、市場経済化の流れと需要から取り残された男性たちではあるまいか？ 女性の活発な消費活動は経済活性化につながるだろうが、この地域で真にジェンダーバランスを実現し、国全体が伸びていくためには、男性たちにも門戸を開いたクレジットや起業チャンスをもっと多く与えるべきなのではないかと強く思ったものである。

アメリカで住んでいたのは南部の田舎町だったこともあり、日本語を勉強している人以外で、日本の文化に興味を持っているという人には殆ど出会ったことがなかった。中央アジアでは、白タクに乗れば「栗原小巻って今どうしてる？」と聞かれ、同僚はみんな村上春樹が愛読書。北野武がお笑い芸人だったということは知らずに「第2のクロサワ」として若者に大人気。先の大戦の後、不幸にも抑留された方たちの優秀さ、勤勉さが語り継がれ、利害関係も含め対日感情が悪い要因が見つからない地域。

讃岐うどんのコシの強さを思わせる手打ち麺のラグマンを食べながら、日本とこの地域の親和性を思い、もっと多くの人に関心を持ってもらいたいと考える毎日である。